

「本別農業 地域と歩んだ80年」

特別企画

第4回 本別経済を支えた2大工場

※写真は本別町歴史民俗資料館、北糖と明治2社の協力で引用しています

明治乳業本別工場の外観写真（1973年撮影）



本別町は戦後復興や第一次ベビーブームを経て、高度経済成長の波に乗り、飛躍的な発展を遂げました。その象徴となったのが、本別町の黄金時代とも言える昭和30～40年代に開業した北海道糖業(株)本別製糖所（当時は大日本製糖(株)本別製糖所）と(株)明治本別工場（当時は明治乳業本別工場）の2大工場です。

人口が1万8千人以上とピークをつける中、十勝管内のライバル自治体に競り勝ち、大工場の誘致に成功しました。畑作に近い北糖、酪農関連の明治とすみ分けし、本別農業の発展には欠かせない存在となりました。そんな2大工場も時代の変化とともにそれぞれの役割に区切りをつけようとする。今、地域経済に寄与してきた歴史や取り組みを振り返ります。（特別企画取材班）

大日本製糖株式会社本別製糖所の外観写真（1962年撮影）



熾烈な 誘致合戦の背景

本別町の製造業の歩みは、マッチの軸木づくりなどから始まった木材業や鉄工業、亜麻を中心とした繊維産業に始まります。農業を基盤に、商業・流通・建設業との結びつきも強まり、町の活気とともに人口も増加。本別町広報や町勢要覧によると、1959年（昭和34年）の住民登録者は1万8858人に達し、小中学校は分校を含めて26校、本別高校には定時制も含め17学級もありました。飲食店や娯楽施設も多く、当時の本別町は十勝管内で帯広に次ぐにぎわいを誇っていたといえます。その勢いの象徴が、2大工場の誘致でした。

1960年（昭和35年）、国の所得倍増政策を受け、地方から都会部への労働力流出が進む中、地方自治体にとって雇用を生み出す大手企業の誘致は急務となりました。本別町でも誘致を目指し、他町村との熾烈な競争が繰り広げ



明治乳業本別工場の新設決定を祝う
本別駅前の看板（1970年8月撮影）

られました。

その中で注目されたのが、ビートの作付拡大と冷害対策を背景に新設が検討されていた北糖（北海道糖業株）の製糖工場でした。新得、清水、芽室、幕別、池田、浦幌なども誘致に名乗りを上げる中、本別町は1958年（昭和33年）に「工場誘致条例」を制定し、町や農業団体、商工業の代表者らによる「本別てん菜製糖工場誘致期成会」を結成。官公庁や道議会への陳情を重ねました。その中で大日本製糖（後の北海道糖業株）は町内3地区で現地調査を実施し、原料や製品の鉄道輸送に有利な勇足地区が有力候補にあり、1961年（昭和36年）、河野一郎農林水産大臣の決断により、本別製糖所とホクレンの清水製糖所の設置が正式に決定し、翌1962年（昭和37年）、本別製糖所は操業を開始しました。

北糖に続いて 明治乳業株の誘致に成功

製糖所の誘致から約10年後、本別町は再び大きな転機を迎えます。今度は全国規模の企業、明治乳業株（現在の株明治）の工場誘致に成功したのです。明治乳業は1917年（大正6年）に設立された極東煉乳株式会社を前身とし、北海道では1923年（大正12年）に十勝清水町で牧場と製酪所の経営が始まりと言われています。本別町農業史によれば、1968年（昭和43年）、明治乳業株北海道支社の中川政一参事が当時の水元孝夫町長、牧田庄二組合長との親交から本別町を訪れた際、十勝南部と東部への新工場建設の構想が持ち上がりました。南部は更別村、東部に本別町が候補としてあり、水元町長と牧田組合長は強い誘致活動を展開。町議会では「明治乳業工場誘致促進調査特別委員会」が設置され、各業界の代表者による誘致促進期成会も発足し、町をあげての誘

致活動が本格化しました。

工場用地には市街地に近く、美里別川と利別川の合流地点にある右岸の土地が選ばれました。1970年（昭和45年）には明治乳業の社長らが本別町を訪れ、工場建設計画を発表。ホクレンの配乳先変更や、4万平方メートルを超える広大な用地の確保を経て、1972年（昭和47年）に総工費約18億円をかけた新工場が完成し、念願の操業が始まりました。

北糖は原料確保に奔走 最新鋭工場誇った明治



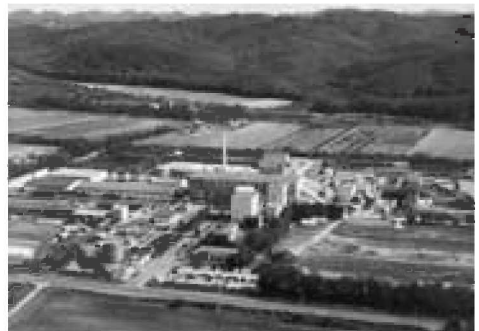
北糖の本別事業所

砂糖事業は、もともと原料生産の基盤が脆弱で、安定的な原料確保が大きな課題でした。甘味資源の自給力強化が求められる一方で、粗糖の輸入自由化や供給過剰による価格低迷といった国の政策に翻弄されてきた歴史もあります。1968年（昭和43年）、

本別製糖所を有する大日本製糖は、北見製糖所の芝浦製糖、道南製糖所の台糖とともに再編され、北海道糖業として統合。その後も組織のスリム化や構造改革を重ね、現在はDM三井製糖グループの一員として事業を継続しています。

本別製糖所は、十勝の肥沃な大地を原料集荷区域に持つ強みを生かし、原料処理量・産糖量ともに北海道糖業の3工場の中で随一を誇っていました。南北約200メートルにおよぶ広大な集荷区域を持ち、陸別町・足寄町・池田町・豊頃町・浦幌町・大樹町・広尾町といった8町8農協と連携体制を築いてきました。農家の経営規模拡大により、一戸あたりの作付面積は増加傾向にあり、2018年から202

北糖工場の全景



4年の平均ビート作付面積は5227ヘクタール、生産量は32万5467トンに達しています。直接栽培の比率も80%近くにまで高まっています。

一方、明治本別工場は操業当初、町内に祝賀の垂れ幕やモニュメントが掲げられ、地域全体が歓喜に包まれました。粉乳とバターの製造からスタートし、月5500トンの原料乳を全自動で処理。脱脂粉乳や全脂粉乳（各25キ）を1万6000袋、バター原料用クリームを生産する最新鋭の設備を誇りました。

1976年にはバターの生産を終了しましたが、1990年以降は濃縮乳やクリーム

の製造を開始。現在はクリームと脱脂乳の製造に特化した工場として稼働しています。原料乳は本別町をはじめ、陸別町・足寄町・池田町高島などから集められ、池北地域の酪農を支える重要な拠点となっています。

製造拠点がなくなる 佐野組合長「寝耳に水」

昭和30～40年代に誕生した2大工場は本別農業に好循環をもたらしました。工場誘致後、品種改良や育苗技術向上が加速し、収量は劇的に伸びました。規模拡大による農業効率化も進みました。特に糖業は裾野の広い産業として幅広い雇用を生み出し、製糖期の白煙や朝の樹氷は本別の冬の風物詩となりました。「ほのぼの君」をキャラクターにした「ほのぼの印」の砂糖は広く定着しています。

しかし、半世紀の経過とともに設備の老朽化が進み、会社全体の事業戦略転換もあり、2大工場とも苦渋の選択を迫

られることになりました。

「寝耳に水。両工場がなくなると聞いた時は本当にショックでした」。2021年8月、北糖が本別製糖所の砂糖生産を2023年3月で終了すると発表し、2023年12月には明治の生産体制再編として2027年9月に本別工場が生産中止予定という話を受け、佐野政利組合長は当時を振り返りました。

2大工場の生産終了は、生産者を直撃する以上に、税収や雇用など地域全体の経済的損失につながります。従業員の配置転換に伴う人口減の加速が危惧されます。唯一の救いは、北糖が拠点として本別事業所を存続させることです。

明治については、本別工場に生乳を出荷している十勝東北部の4農協が「明治本別工場生産中止に伴う4JA対策協議会」を設立しました。同協議会が配乳権を持つホクレンや北海道中央会に要望書を提出したことで、生産者や輸送業者の負担を最小限に努めるよう、ホクレンと明治が交渉を重ねています。

「地域に貢献、今後も」 北糖、明治工場長の思い

北糖は本別事業所として生まれ変わり、砂糖の原料となるビートの受け入れ体制を強化しています。今秋、大型車両に対応するトラックスケール（車両重量計）を導入しました。来年度には老朽化しているビートパイラー（ビートを積み上げる大型機械）を更新します。製糖工場から堆積場や保管場所へ役割が変わる中、施設機能強化で地域農業を支援していく狙いです。

鶴見卓也所長は「本別は原料調達を確保する上で重要な拠点であることに変わりなく、将来に向けて安定の体制をつくり出す」と大型投資について説明した上で、「これまでビートを安定供給してくれた本別に感謝しており、今後も砂糖の自給率向上に貢献し

たい。砂糖以外の『プラスワンの事業』にも協力していきたい」と力を込めます。

明治本別工場は2027年9月をもって生産停止を迎えますが、これまで地域経済や農業に貢献し、社員一人ひとりが自信と誇りを持つての仕事は変わりません。

小倉弘幸工場長は「工場操業から半世紀にもなり、本別町や地域のみならず共に歩んでこられたことに感謝しています。原材料不足や経済的な変動など多くの課題もあり



明治本別工場の
小倉弘幸工場長



北糖本別事業所の
鶴見卓也所長



北糖本別事業所に導入されたトラックスケール

ましたが、地域の力強い支えで幾度も困難を乗り越え、その経験と絆は地域農業と乳業の発展に寄与できました」と感謝の言葉を述べています。

【予告】

次号では、佐野政利組合長と田中敏行前組合長のインタビューをはじめ、歴代組合長にスポットを当てて特集します。
ぜひご覧ください。